

## 國重先生とナサニエル・ホーソーン

林 文 代

この三月をもって、国重純二先生が駒場を去られることになった。突然のことというわけでもなく、あらかじめ了解しているはずであるにもかかわらず、まだ実感は湧かない。

振り返れば本郷の大学院に入学したとき、一番上の先輩としていらしたのが国重さんであった。(先生と呼ぶのはかえって不自然なので、以下国重さんと呼ばせていただくこととお許し願いたい。)大橋健三郎先生のゼミでは一回の授業で2人発表することになっていたが、ジェームズの『ある婦人の肖像』の担当者として、新米の修士1年生であった私が初めて発表することになったとき、組んでくださったのが国重さんである。どうにか発表を無事済ませることができたとすれば、それはおそらく(というのも、新米の私は自分のことで精一杯で、何がどうなったか失礼ながら覚えていない)先輩のお蔭である。

そのような先輩としての国重さんについては、アメリカ科の同人誌『うずしお』の最新号に書かせていただいた。ここでは『うずしお』に書けなかった国重さんの御研究の一端について私なりに語らせていただきたいと思います。といっても国重さんの御関心は、ピューリタニズムに始まり、19世紀はもとより、20世紀の作家にいたる幅広いものである。しかも文学にとどまらず、映画についての蘊蓄の深さも相当なものであると洩れ承っている。翻訳のお仕事も数多く、ウィリアム・インズの『さよなら、ミス・ワイコフ』、ジョン・バースの『キマイラ』、マクドナルト・ハリスの『ヘミングウェイのスーツケース』など、現代アメリカ文学の代表作を訳されている。

そうしたなかで国重さんのこれまでの御研究を代表するのは、なんとといっても『ナサニエル・ホーソーン短編全集』(南雲堂)であろう。全3巻からなるこの膨大な全集は、現在第2巻まで刊行されている。ホーソーンの「全短編86篇」を「本邦初の単独個人訳」として成し遂げるという偉業を達成しつつある国重さんの情熱と忍耐と努力には、当然ながら頭が下がるが、怠惰な読者として何より有難いのは、勞せずしてホーソーンの短編の面白さをこれらの全集を通してあらためて味わうことができるということである。

ホーソーンといえばメルヴィルと並んでアメリカ文学を代表する巨匠であることは、キャノンの見直しがかばれてすでに久しい現在においても大方の認めるところである。代表作である『緋文字』を始めとする長編は言うに及ばず、「ぼくの親戚モーリノー少佐」、「優しき少年」、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」、「アリス・ドーンの訴え」、「憑かれた心」、「若いグットマン・ブラウン」、「ウェークフィールド」、「メリー・マウントの五月柱」、「牧師さんの黒いヴェール」、「デイヴィッド・スワン」、「エンディコットと赤い十字」、「鉄石の人」、「大紅玉」などなど、一巻と二巻に収められたものの中から無作為に選んでみても、どれも深い味わいのある物語であることに間違いない。第三巻に収録される予定の「痣」、「利己主義——胸に棲む蛇」、「天国行き鉄道」、「美の芸術家」、「ラパチャーニの娘」、「イーサン・ブランド」、「人面の大岩」、「雪人形」なども、学生時代に読んだ強烈な印象が今でも消えないほど衝撃的な物語たちである。

これらの短編が「衝撃的な物語」であるというのは、断じて社交辞令ではない。ホーソンと言えば私が学生であった大昔でさえ、古臭い教訓噺という評価が少なくなかった。とりわけ短編はそうであった。私など決してホーソンの良い読み手であったことはない。それにもかかわらずホーソンの物語群は衝撃的であったし、今もそうでありつづける。すでに挙げたどの物語をとってみても、読む人の心に不安の小波がたたないものはない。ホーソンの物語はその物理的短さ、教訓噺という古びた表現にもかかわらず、時には世界観、人生観を変えてしまうほど人の心に大きな跡を残す。

国重訳の全集を手に取り、いつとき物語の世界に遊んだのち、詳細な「人と生涯」、さらに作品分析・研究といってよい「訳者解説」を読む。しかし、衝撃的な物語を読んで不安になった心を慰めようとしても無駄である。なぜなら国重さんは安易に特定の解釈を読者に与えたりはしない。たとえば「ウェークフィールド」。「この作品はテーマが極めて斬新なので若い読者に高く評価されるかもしれない」と書き始める国重さんは、「しかし、それはテーマだけのことであって、短編としての評価はまた別である」と読者を突き放す。たとえば「若いグットマン・ブラウン」。「ブラウンが森の中で経験したことが夢であったかどうか」ではなくて、「ブラウンが一夜の経験ですっかり変わってしまった」ことに着目すること、それこそが問われていると国重さんは言う。

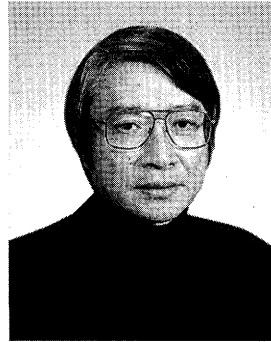
国重さんはまるでホーソンのように、物語をわれわれに与えて不安にさせてくれる。不安、衝撃、心の座標軸の移動——そうした経験を与えてくれる『ナサニエル・ホーソン短編全集』は、単なる翻訳ではない。40年近くに及ぶ国重さんのホーソン研究の見事な成果である。

国重さんは駒場を去られるが、今後とも御健康に御留意の上、ますます御健筆を揮われることを心より祈念し、一後輩の送る辞とさせていただきます。

## 國重 純二(くにしげ じゅんじ)先生 年譜および業績表

### [年譜]

- 1942.01.20 旧満州国間島省図們市に生まれる  
 1960.03 香川県立高松高等学校卒業  
 1963.03 東京大学教養学部文科Ⅱ類修了  
 1966.03 東京大学文学部第3類卒業  
 1969.03 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学  
 専門課程修士課程修了  
 1972.03 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学  
 専門課程博士課程単位取得退学  
 1972-1974 千葉大学教養部講師  
 1974-1975 千葉大学教養部助教授  
 1975-1986 東京都立大学人文学部助教授  
 1981-1982 コーネル大学, ハーバード大学客員研究員  
 1986-1992 東京大学教養学部助教授  
 1992-1996 東京大学教養学部教授  
 1996-2001 東京大学大学院総合文化研究科教授



### [業績]

#### \* 論文・エッセイ等

- 1969.03 A Study of Nathaniel Hawthorne (東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専門  
 課程修士論文, 文学修士)  
 1968.04 「The Confidence-Man」(『論』1号, 「論」同人会)  
 1969.07 「ホーソン覚え書」(『論』3号, 「論」同人会)  
 1971.10 「ナサニエル・ホーソン〈ラパチーニの娘〉を中心に」(『アメリカ文学』25号,  
 日本アメリカ文学会東京支部)  
 1974.12 「ヘンリー・ジェームズ『使者たち』を中心に」(『千葉大学教養部研究報告』千  
 葉大学教養部)  
 1977.03 「ナサニエル・ホーソン—少年時代(1)」(『人文学報』124号, 東京都立大学  
 人文学部)  
 1977.11 「ナサニエル・ホーソン—少年時代(2)」(『アメリカ文学』34号, 日本アメ  
 リカ文学会東京支部)  
 1978.06 「創作のもたらす喜びのために—ホーソンの場合」(『不死鳥』46号, 南雲堂)  
 1979.03 「ナサニエル・ホーソン—その大学時代」(『人文学報』136号, 東京都立大学  
 人文学部)  
 1980.09 「優しき少年」(大橋健三郎教授還暦記念論文集刊行委員会編『文学とアメリカⅡ』,

南雲堂, 分担執筆)

- 1981.04 「ジョン・バース『キマイラ』—物語の中の物語の中の……」(ジョン・バース  
 <特集>) (『ユリイカ』13巻4号, 青土社)
- 1982.03 「ホーソーンを読む」(『アメリカ文学読本』, 有斐閣, 分担執筆)
- 1982.11-1983.12 「洋書の窓」(『朝日ジャーナル』, 朝日新聞社出版局)
- 1984.03 「アメリカ文学のヒロインたち」(*Tsurumi Review*, 14号, 鶴見英文学会)
- 1984.06 「ナサニエル・ホーソーン」(『別冊英語青年』, 研究社)
- 1984.06 「アメリカ文学の現況と翻訳」(『文芸年鑑』昭和59年版, 新潮社)
- 1985.06 「アメリカ文学の現況と翻訳」(『文芸年鑑』昭和60年版, 新潮社)
- 1986.04 「不条理の網目に囚われて—60年代文学—」(『英語青年』132巻1号, 研究社)
- 1988.12 「*The Blithedale Romance* の隠された意匠」(『英語青年』134巻9号, 研究社)
- 1992.02 「ホーソーン文学と宗教」(小川晃一他編『宗教とアメリカ』, 木鐸社, 分担執筆)
- 1993.10-1996.12 「アメリカ文学の裏側」(『メンズクラブ』, 婦人画報社, 36回連載)
- 1994.10 「人と生涯1, 訳者解説」(『ナサニエル・ホーソーン短編全集第一巻』, 南雲堂)
- 1997.01-1997.12 「映像と活字の間」(『メンズクラブ』婦人画報社12回連載)
- 1997.01 「Heroines in American Literature」(『事務局だより』, 日本ホーソーン協会)
- 1998.08 「アメリカ文学」, 湘南英文学会, 横浜, 講演。
- 1999.06 「アメリカ小説の主人公」, 中・四国アメリカ文学会, 岡山, 特別講演。
- 1999.08 「*The Sun Also Rises*—文学的NADAの世界」(『英語青年』145巻5号, 研究社)
- 1999.10 「人と生涯2, 訳者解説」(『ナサニエル・ホーソーン短編全集第二巻』, 南雲堂)
- 2000.04 「アダムとイブ(?)の物語」(『教養学部報』437号, 東京大学教養学部)
- 2000.05 「リチャード・バック 空を飛ぶ求道者」(『週刊朝日百科 世界の文学』45号,  
朝日新聞社出版局)
- 2001.01 「ティファニーで朝食を」(『教養学部報』444号, 東京大学教養学部)

\* 翻 訳

- 1972.03 ウィリアム・インジ『さようなら, ミス・ワイコフ』(新潮社)
- 1974.04 アラン・ホワイト『埋葬の土曜日』(立風書房)
- 1975.05 カーロス・ベーカー『アーネスト・ヘミングウェイ』(筒井正明他と共訳, 新潮社)
- 1975.09 ヴァン・ワイク・ブルックス他『社会的批評』(井上謙治と共訳, 研究社)
- 1976.03 ヴィンセント・フライマーク他『奴隷制とアメリカ浪漫派』(谷口陸男他と共訳,  
研究社)
- 1979.03 K. R. シッケル「作家ジョン・チーバー」(『トレンズ』45号, アメリカ大使館)
- 1980.02 E. ロビット「アメリカの小説家たち」(『トレンズ』10巻1号, アメリカ大使館)
- 1980.09 ウィルソン・マッカーシー『S・S特命部隊』(立風書房)
- 1980.12 J. ヒューストン「アメリカ西海岸の文学」(『トレンズ』10巻6号, アメリカ大使館)
- 1980.12 J. ブレスリン「事実と虚構」(『トレンズ』10巻6号, アメリカ大使館)
- 1980.05 ジョン・バース『キマイラ』(新潮社)

- 1982.10 J.グリーンバーグ「合流にご用心」(『すばる』5巻1号, 集英社)  
 1985.02 ナサニエル・ホーソン他『鉄道諸国物語』(小池滋と共訳, 弥生書房)  
 1986.08 A.ベンディクセン「合作小説『家族』創作の顛末記」(『トレンズ』16巻4号, アメリカ大使館)  
 1990.10 トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』(新潮社カセット文庫)  
 1991.09 マクドナルド・ハリス『ヘミングウェイのスーツケース』(新潮社)  
 1994.10 『ナサニエル・ホーソン短編全集1』(南雲堂)  
 1999.10 『ナサニエル・ホーソン短編全集2』(南雲堂)

### \* 書 評

- 1979.12 T.ピンチョン著, 三宅卓雄他訳「『V.』」(『朝日ジャーナル』21巻50号, 朝日新聞社出版局)  
 1981.01 「研究の現況と課題——ナサニエル・ホーソン」(『英語青年』126巻10号, 研究社, 書評と解説)  
 1983.05-1984.02 「海外新潮」(『英語青年』129巻2号, 5号, 8号, 11号, 研究社)  
 1984 A.ターナー著「ナサニエル・ホーソン」, J.メロウ「ホーソンとその時代」(『英文学研究』61巻1号, 日本英文学会)  
 1986.04 「Hawthorne Studies in Japan, 1982-1985」(『ニューズレター』5号, 日本ホーソン協会)  
 1989.03 E.ヘミングウェイ著 沼澤治治訳『エデンの園』(『波』, 新潮社)  
 1990.11 ソール・ベロー著 宇野利泰訳『盗み』(『波』, 新潮社)  
 1994.01 H.D.ソロー著, 飯田実訳『コッド岬』(『波』, 新潮社)  
 1995.08 A.タイラー著, 中野恵津子訳『モーガンさんの街角』(『波』, 新潮社)  
 2000.09 丹羽隆昭著『恐怖の自画像』(『週刊読書人』2000年9月29日, 読書人)

### \* 講演・発表・司会

- 1971.10 「『七破風の屋敷』を中心に」, 日本アメリカ文学会, 学習院大学, 発表。  
 1973.05 「ホーソンの Actuality と Reality」, 日本英文学会, 東京都立大学, シンポジウム発表。  
 1978.03 「書く——ホーソンの場合」, 日本アメリカ文学会東京支部, 慶応大学, シンポジウム発表。  
 1980.07 アメリカ研究京都セミナー, 京都セミナー実行委員会, 京都, 研究会司会。  
 1981.05 『キマイラ』, 日本英文学会, 創価大学, シンポジウム発表。  
 1982.03 「Contemporary Japan」, マサチューセッツ教育学会, ボストン, シンポジウム講演。  
 1983.04 「ホーソンとその妻」, 日本アメリカ文学会東京支部, 慶応大学, 発表。  
 1988.05 「Hawthorne, The Exocist」, 日本英文学会, 名古屋大学, シンポジウム発表。  
 1989.08 「宗教とアメリカ」, アメリカ研究札幌クールセミナー実行委員会, 司会, 発表。  
 1992.05 「アメリカの小説」 昭和女子大学英文学会, 東京, 講演。  
 1995.04 「アメリカの文学」, 高松高校, 高松, 講演。

1995.05 「アメリカ文学のヒロインたち」, 日本ホーソン協会, 麗澤大学, 特別講演。

**\* 所属学会, 委員会など**

学内委員：第6委員（学生委員）, 第9委員（将来委員）, 第7委員（入試委員）, アメリカ研究資料センター運営委員, 英語教室運営委員, 英語教室人事委員長, 教養学科アメリカ分科主任, 教養学科委員, 教養学部広報委員長等歴任。

学外役員：日本アメリカ文学会会長, 日本英文学会会長, 日本ホーソン協会理事等歴任。